

動であり、頭で考えて勝てるわけもなく、体に覚えこませるか方法がないわけ、この辺にミスジャッジがあったのだから。

こうやって書いていくと次から次へ色々な事を思い出し、実に楽しい。西高というのは、やはり勉強第一の学校であったが、その中で一年、二年と、とにかく卓球の事しか考えず夢中で過ごしたということも、貴重な青春の一ページだったと思う。

おわりになったが、長期にわたりお世話になった藤崎先生、古川先生に感謝するとともに、今後の西高卓球部の一層の発展を期待したい。

部誌より抜粋 昭和二十七年六月十六日（内田）

荻村さん優勝の報に部員諸君の反応は——佐藤君、三浦君、斉木君、僕の四人はラジオを聞いて、その模様を身振り手振りで一生懸命話し合った。「すごかったぞ。スマッシュの連続だった。」「荻村さんもカットに追い込まれたらしいぞ。」等々。沼口君はラジオを聞かなかったのが残念残念。「新聞で見た。聞きたかったな。」ともっぱら僕達の話の聞き役。放課後加藤先生が来て「荻村君が優勝したそうじゃないか。藤崎先生に知らせたかい？ だめじゃないか、真先に知らせなくちゃ。それから祝賀会を開こう。あまり月日のたたないうちにね。」やっぱり大人は大人だけのことはある。

当時の思い出

九期生 内山 公男

当時を振り返ってみると、自分のいたらなさばかりが目につき、恥ずかしい思いでいっぱいです。同期生は、私と森・服部の三名であり、戦績も芳ばしくなく、なるべく忘れようと努めたためか、現在も印象に残っていることが非常に少ないことに、こうして書きながらがっかりしている次第です。

卓球部に入って驚いたことは、「西高の壁」と言われ他校選手に恐れられた浜田先輩のショット戦法でした。当時は、フォアハンドで極力拾いまくる卓球が本流であり、バックハンドの練習は気兼ねなくできなかったという記憶があります。ですから、フォアで処理できないものは、バックハンドでなくショットで返すという型をとらざるを得なく、その意味で浜田先輩に教えられるところは大きかったと思います。この頃の典型的な卓球は、他校の選手の話で申し訳ありませんが、高輪高校の豊巻選手の卓球で、文字どおり「飛燕」の如く右へ左へと走って九割近くフォアハンドで打ち込むのですから、我々に強烈な印象を与えました。

練習は非常にきつく、なかでも、真夏のフットワークの練

習は一番こたえました。荻村先輩が、「苦しくなって気が遠くなるような一瞬をすぎるとかえって楽になるものだ」ということも言われたと聞いて、大いに頑張ったものです。もっとも、意気地が無くてそこまでは至りませんでしたかね。

それから、ずっと続いてきた日誌を書き続けることができて良かったなあという思いもあります。何を書いたかは極く一部分しか記憶になく、今、母校を訪ねて見ることができないものならば、一番に見たいものです。しかし、このことはあとになる程良い思い出として残っていますし、自分自身の考えをまとめるという意味でも大へん意義のある事であったと考えます。

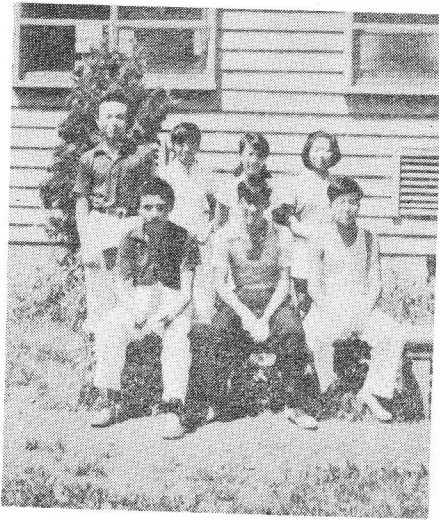
戦績は芳ばしくなく、従ってあまり覚えていませんが、ただ、都の選手権戦だったと思いますが、森と組んだダブルスで、クジ運にも恵まれましたが、森の「フアイト」の声にはげまされて準々決勝まで進んだこと、また、私自身については、シードされていた中大杉並高の吉田選手とフルセットの大接戦を演じ、敗れましたが、周囲の大声援を受けたこと、などはなつかしい思い出です。

今、考えてみますと、高校時代というのは非常に精神不安定な時だったと思います。自分より明らかに技術が下だと思いう相手によく負けました。練習を積んでコンディションをととのえ勇んで試合に望み、オーダーを見て、シメタ！この相手なら、と思ったら案に相違、調子の出ぬまま負けてしま

ったという経験は誰にもあると思います。大学に入ってから、勝てるはずが負けたということがほとんど無かったことからみても、いかに不安定であったかがわかります。

私は、現在、愛知県安城市に住んでいます。東京を離れて一度も母校を訪ねておりませんし、まして、西卓会の会合などに出席皆無です。藤崎先生ともにお元氣の様子ですし、部の活動も活発の様ですから、何とかして機会を見つけて行きたいというのが念願です。

とりとめのないことを書きましたが、最後に、何事をやるにも「全力投球」ということを現役諸君に望んで筆を置きます。



▲内山、村田、川上、遠藤
林、松谷、津々良